

華族生活

横から見た

特 252
596

野村繁著

10

1



* 0039046000 *

0039046-000

特 252-596

横から見た華族生活

野村繁・著

東亜書房

昭和 11

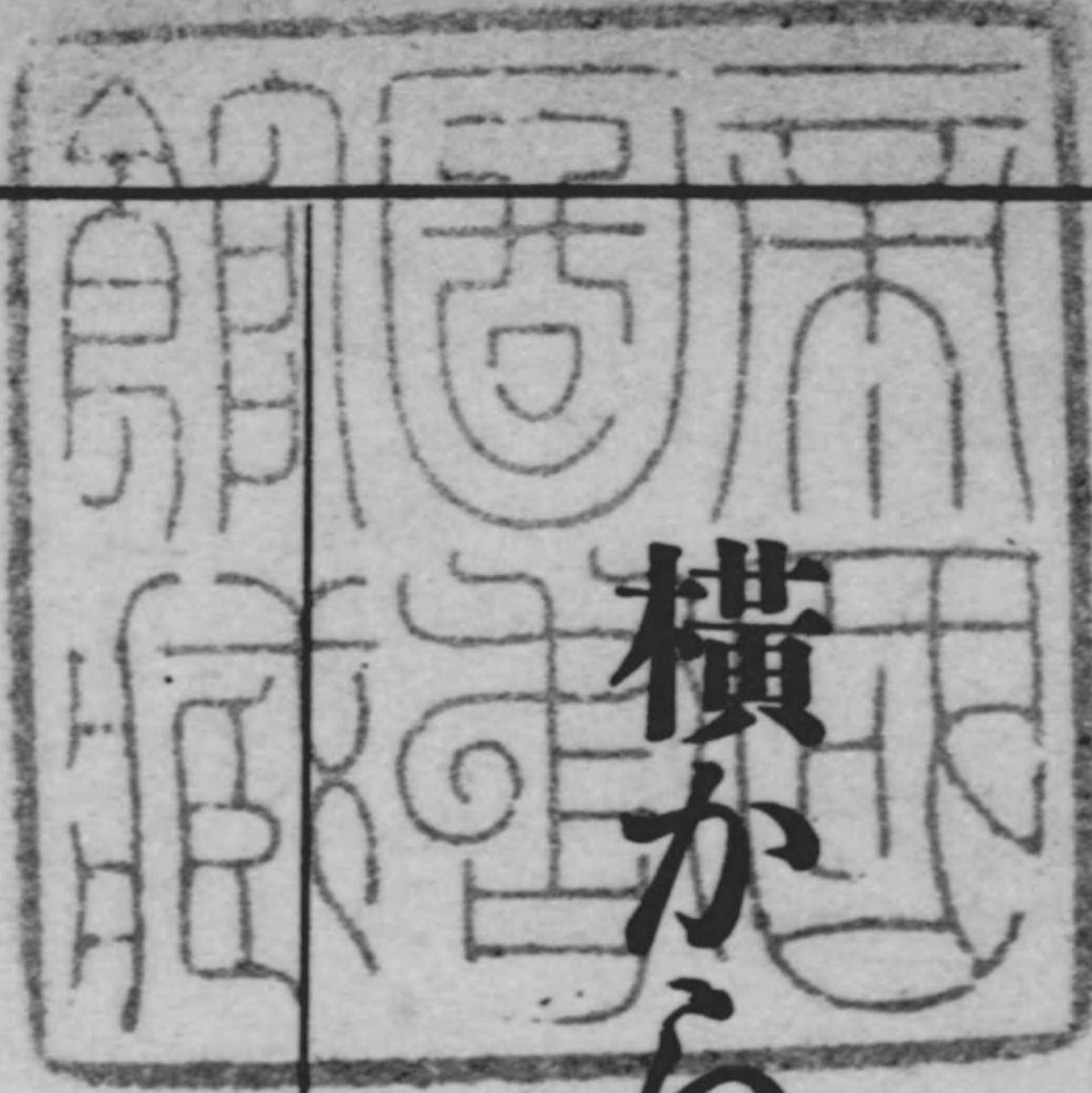
AGH

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法第67条の規定に基づき、平成12年3月24日付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものである。

特252
596

野村繁著

横から見た華族生活



東京 東亞書房



序

一般に華族様と云へば、とても近寄り難いお偉いものの通有觀念がある。尤も華族にさんをつけて華族さんと敬稱する。これを假に平民にさんをつけたらどうだらう。どうも平民さんなんて云つたつて凡そ妙なものである。物の本によればこんな風に書いてある。

「姓を重んじ族を尊ぶは、我建國の大精神にして、國體精華の依つて繋がる所たり。然るに明治維新以降、西洋文物の輸入と共にこの思想の根底に動搖を來し、祖宗崇敬の念漸く消滅せんとするもの如し、豈慨嘆に堪ふべけんや。特に華族は皇室の藩屏、國民の儀表として、其先、或は神裔皇孫に出づるあり、功臣名相に出づるあり、常に國光を相伴ひ、國威を相隨して、上下三千載の歴史を作り、邦家今日の隆昌を運き來りぬ……」

なんてあるから、全くやつぱりお偉いのかなといふ氣持にもなる。しかし華族とても人間である。又しても繰り返され、その無軌道振りもとどまることを知らない様な

彼等のスキヤングルの暴露に、無智な一般はただ痛快味だけしか感じないとしたらそれは平民の弱點であらう。さりとて、今日の社會と時代とを解しない華族が、皇室の藩屏とか特權階級とか思つて偉がつてゐたとしたら又おかしいものである。

一代の自由人である故板垣退助伯は早くは大正元年に「華族一代論」なる書を著して同族及び社會に檄してゐる。其他原敬の如く固く授爵のことを拜辭して、一介の平民の氣易さに停まらうとした者があるに反して、數千金、數萬金積んでもよい、華族のハシクレに入りたいものと策動する得體の知れない者も居る妙な世の中である。事程左様に關心の持たれる華族社會の生活とはどんなものか、これを縦横に眺め盡すことはとても限られた紙數では許されぬ。しかしここに横から見た華族生活の片鱗によつて、もつとバラエティに富んだ彼等の生活の全貌をうかがひ知るに難くはないだらう。

著 者 識

横から見た華族生活 目次

名門と美人と金とのルツボ……………	(七)
變り種九十二歳まで生きた華族……………	(一五)
エロテツク王、俊輔・伊藤……………	(一七)
華族會館故事來歴……………	(一九)
百萬圓すつて怒鳴られた華族……………	(二三)
社會主義の殿様と藝妓……………	(二五)
子爵令嬢の結婚エピソード……………	(三〇)
大隈夫妻を困らせた不義の戀……………	(三三)
自分の妻を斬つた侯爵様……………	(三四)

後家さんの入婿になつた公爵……………(三五)

野風呂で拜まれる殿様學者……………(三六)

百萬石華族の豪華版……………(三八)

金の延棒にアクビさせてる華族……………(四〇)

小鳥で儲けてゐる公爵……………(四二)

娘を賣物に出す貧乏華族……………(四四)

金持華族の超弩級……………(四八)

債鬼の爲坊主になつた子爵……………(五〇)

華族會館の草花まで泣く話……………(五二)

名門と美人と金とのルツボ

白蓮、柳原燐子^{らんこ}女子の歩んだ道も亦、人生數奇の中の一つであらう。華族様の落胤として生れ、門閥の養女となり、更に其の家の妻となり、一轉して炭坑王の後妻として華々しく迎へられ、宛も世間羨望裡にあつたかと思ふも束の間、再轉して一社會主義者の愛人の許に走つてしまつた。これが一時世間を騒がした白蓮事件なのだ。

明治十八年、燐子は堂上公卿の名家である伯爵柳原前光^{まきみつ}の妾腹の子として生れた。伯爵夫人は南國の某大名華族から柳原家へ輿入した人で、非常に綺麗でしかも聰明な美人であつたが、惜しいことに子供がなかつた。

それに引きかへ藝者上りの妾腹には子があつた。それが燐子である。燐子は生れると直ぐ伯爵家に引きとられ、正妻の實子として披露された。正妻に子供のなかつた事が、はからずも燐子には何よりの幸となつて、彼女は實の母子の愛情をもつて養育せられ、何の不自由も感ぜず生長して行つた。

丁度、その頃、柳原家の縁邊に當る子爵北小路隨光は、柳原家の分家格で、同じく日野の一門であるが、嗣子資武の將來の妻として、燁子を懇望してきたので、彼女は間もなく北小路家の養女となつて引きとられたのであつた。

北小路子爵には、最初久子夫人との間に子がなかつた。その爲老子爵の後繼として、柳原伯家から、前光の令弟光典を養子としたが、好色な隨光は女中に手をのばして、遂に資武を産ませしめた。そこで光典は義理をたてて、離縁をとつたものである。

さて、女中の腹から生れた資武は久子夫人の實子として、隨光の後目に直つた。賢明な久子夫人は實子に對する愛情で資武を養育したから、資武は我儘一杯で育てられた。光典が離縁となつてからは、本家分家の柳原家と北小路家との間柄も自然拙い事となつた。そこで此の間隙を融和させる政略から、燁子が將來資武の妻といふ名目で、養女として北小路家にやられたものである。

北小路家は元來京都の貧乏華族で御維新の際帝都奉遷と共に東京に引移つたのであつた。別に財産らしいものはないのであるが、所謂、堂上公卿の常として因襲に囚はれ、日常茶飯事にまで形式を八釜しく云つた。けれど老子爵も老夫人も、燁子に向つては、まるで實子のやうなものである。

愛情をもつて可愛がつた。これで將來夫人となるべき資武が普通の人物であつたならば、燁子もさほど數奇な運命を辿らずに済んだかも知れなかつたのだが、當の資武は我儘一杯に育てられた結果として年と共に段々悪すれて來た。それが燁子にとつては、子供心にも何よりも厭でならなかつた。しかし牢固として、抜くことも出來難い因襲によつて、先は必ず夫婦とまで運命づけられてゐる上はどうしても資武の手から逃れ去る道は考へられなかつた。こうして燁子は資武の妻となつたが、妻となつてから後も、さういふ譯で少しも善い事情には轉換できなかった。

資武は、學習院の中學部さへ卒業しないで、いつも家にごろ／＼と遊んでゐた。それで居て子が出來た。尤も遊んで居て子の出來ることは何の不思議もへん、つもないのだが、不愉快な亭主の胤を宿し、十七の若い身で既に産みのつらさを知つた燁子こそ不幸であつた。もと／＼身の丈夫でなかつた彼女は、子を生んだ後、いろ／＼の苦勞のために、健康ははかばかしく回復しなかつた。子供の名は功光とつけられたが、乳が足りないので、功光の成長は不順であつた。

さて、その年の十一月になると、北小路家は京都へ移轉することとなつた。老子爵は、生れ

故郷の京都に對しては可成り根強い執着を持つてゐた。いつも京都へ歸らうといふことは老夫婦が口癖のやうに云つてゐたのであるが、それが實現されたのである。彼女、燐子にしては東京を去ることは不満であつたが、今更それをどうする術もなかつた。

京都へいよく移つてからは、不思議と、老夫婦の燐子に對する愛情がコロリと以前に比べて變つてしまつた。彼女の氣持とはまつたく彼等は縁のない存在となつてしまつたのである。夫の資武との間には、元より何等の理解もなかつたし、ただ子供の功光だけが辛じて彼女に最も近いものだつたのだが、それさへも子爵夫人から殆んど取りあげられかけて居たのである。育兒上の事については、燐子は新しい見解を持つて居たけれども、それは何から何まで老夫婦から無視され、非難されるばかりだつた。しまひには「功光のことは一切私に任せなさい」とまで暴言されてしまつた。

その頃、三本木のお茶屋に居た女が、北小路家の上女中として人つて來たが、それが間もなく資武と只ならぬ關係を結んだ。

燐子にして見れば、最初から、夫の不行跡に對しては、何の關心も持たなかつたが、しかしさうした事があればある程、彼女の夫に對する反感の募つて行くのをどうすることも出来な

つた。燐子は急に東京が戀しくなつて來たので、自分の心持を姉の信子のところへ、手紙で知らせてやつた。それに對して、母未亡人が京都へやつて來た。そして燐子に向ひこんな意味のことを云つた。「どんなことがあつても辛棒おし、若し離縁にでもなつたら、平民の所へでも再縁するより外に仕方がないぢやないか」と。こう云はれて見れば、華族の社會に育つた燐子として、平民といふ未知の世界は誠にそら恐ろしい極みであつた。彼女は死んだ積りで辛棒するといつた。それで母未亡人は機嫌を直し久しぶりで東京へつれて歸ると云ふことになつた。

彼女は喜び勇んで東京行きを共にした。東京へ着くと、すぐ姉の信子に合つた。彼女にとつては誰一人の同情者である信子は、彼女を涙の目で迎へた。そして色々な物語りをしたが、その話のうちには、彼女のびつくりする様なことがあつた。といふのは、燐子が、餘り北小路家をいやがつて居るから、東京の柳原家では、彼女を押しつけて嫁にして貰つたことに引目を感じ、都合によつては、引取つてもよいといふことにまで話が進んで居るといふことであつた。そして母の未亡人は、その事を燐子に告げるためにさく京都まで行つたのである。それを聞いて、燐子は何とも云ひ知れぬ腹立しさを感じた。それならば、何故母未亡人は京都であんなやうなことを云つたのか、もうさういふ相談が東京であつたものなら、直ぐ離縁しても歸るも

のであつたものと思ふともう矢も楯も溜らなかつた。燦子は早速兄の義光や姉に向つて離縁の意思を訴へた。すると今度は母未亡人が妾の前で二枚舌を使つたと云ふので、燦子に對してすこぶる悪感情を抱く様になつた。

しかし離縁話は其後急に進んで、燦子は一度それから京都へ行つたが、すぐ暇を貰つて麻布の柳原家に戻つて來てしまつた。柳原家では先代の前光は物故して、義光の代になつてゐた。

この義光には川村伯爵家から、花子と呼ぶ若い美しい婦人が嫁に來て居た。家庭は一見頗ぶる圓滿なのであるが、ただ燦子だけに對しては、出戻りの女として、召使人までが何となく冷やかであつた。ただ姉の信子だけが、相變らずたつた一人の味方として、心底から淋しい彼女、燦子を慰めてゐた。

こうして彼女は窮屈な生活を、可成り長い間送つた。その間に一二度縁談も出たが、彼女はそれを押し切つて、東洋英語女學校に入學し、三年の春秋を送つた。

赤銅御殿の主、九州の炭坑王伊藤傳右衛門から縁談のあつたのは、それからすつと後のことであつた。彼女の口説役には、兄嫁の花子が當つた。その時花子の口から漏らされた話といふのはこうであつた。

傳右衛門には子もなく養子もなく、五百萬圓もの財産を繼ぐ者がなないといふこと。人物は只一代でそれだけの財産を作つた程だから、なかく、豪い人であるといふ事。村で高等女學校を經營して居て、彼女にその方のことは任すといふ事。金はいくらでも自由に使へるし、舊家とか家柄とかを尊ばれてゐる人よりも氣樂であるといふ事。婿の年は五十一であるといふ事等であつた。

當時の燦子にすれば、年のことなどは何うでもよかつた。それだけの財産を自由に使つて、教育や藝術の事に向けることが出来る。そのことのみで彼女の胸は踊つたのだ。話はさて意外に順調に進んで、明治四十四年の春、この結婚式は、日比谷の大神宮で華々しく舉行された。その時の結納金は二萬圓であつたとか、世間の風評は高かつた。事實結婚の支度は、今までにない豪華版であつた。

こうして二十七の華族の御令嬢は、五十一歳の平民の後妻になつた。そして式をすませて後、直ちに筑前幸袋の本邸に落ちついたが、來て見ると、案に相違で、今迄抱いて居た理想や憧は夢のやうに消えて行つてしまつた。どういふ身分のものだか分らない女達が、何人も邸内をうろくしてゐた。

それに、結婚した後は、頗る自由な朗らかな生活が始まる筈であつたのに、一向空気が沈滞し切つて居た。それに加へて、傳右衛門の言動は、まことに、いかにも成上り者そのままの野卑没趣味そのもので、これは例へれば豚に眞珠を配合したより悪かつた。勢ひ、これ等の事情は感じ易い彼女の心にど強い迫壓を最初から與へてしまつた。

少くも最初から受取つた印象は、彼女の期待をもの見事に一切裏切つて、大層不良のものにしてしまつたが、さてその不良は其後も次々と加へられてゆく不快極まる醜事實によつて次第に増大されていつた。

その結果は大正十年十月中旬、大阪日日新聞に、公開されて世間に異常なトビツクを投げ出した。これが燐子から傳右衛門に對する絶縁状ともなつて、俄然爆發してしまつた。

この問題は當時可なり世間を騒がせたものである。結局彼女は伊藤家を去り、愛人である、一辯護士、宮崎龍介氏の許に走つて、ここに甦生の第一歩を踏み出したことは餘りにも明白に讀者の記憶に残つてゐることであらう。

變り種九十二歳迄生きた華族

大隈さんでないが、百二十五歳まではどうかは知らぬが、百ぐらゐまでは大丈夫だらうと太鼓判を押された様に云はれてゐた男、大倉喜八郎男爵は、もうあと八年で百といふ所まで行つて、惜しくも九十二歳で死んだ。人生五十年ながしさへ生きられない短かい相場から云へば凡そ二人前も生きたものだから、これは決して若死ではないのだが、これでもやはり、もつと生かして置きたい人物であつた。

彼は京都に地所を持つてゐた。或人が何かの話のついでに、それを都合で讓つて呉れと云つた時、彼は大きな口と鼻とを一しよに撫でて、あの土地は、私が老後を養ふために買つて置いた所だから、折角だが賣れないよと云つて斷つてしまつた。その時の彼は八十八であつた。世間なみであれば、米壽の祝ひでもあつて、もうヨボ／＼の爺さんである筈の彼が、尙餘裕しやく／＼とした、宛も現在五十年輩の者でも云ふやうに、老後の事を云々したところを見ると、自分はまだ、餘程若いつありで居たに違ひない。こういふ意味でも九十二歳翁大倉男の死は惜

しみても餘りあるものであつたのだ。

骨相學者に云はせると、口の大きい人は活動家だと云ふ。大倉男の口はなるほど、飛びぬけて大きかつたやうだ。だがその大きさはどれほどであつたかを知つて居る者は先づ無いといつてよからう。何故と云ふに、倦怠を知らない大活動家である彼は、九十二年の一生を通じて、一度も欠伸をしなかつたからである………なんかと駄洒落するのはもうこの位にしやう。しかしそれほど潑刺な男のことだから、日本内地はおろか、支那朝鮮をそれこそ大跨にかけて、彼の關係した事業は數限りもない。或る人は彼を評して今太閤ぢやと云つた。又或る人は事業の神様みたいだとも云つた。全く彼の一生は事業の着物を著て、事業の帽子を被り、事業の下駄を穿いて、歩き廻つて居たやうな感じがするのである。それでゐて、普通大事業者と云へば、その誰もが手を出す株式相場といふものには、たゞの一度も首を出したことがなかつた。

歐洲戦争の好況時代の頃であつた。或時、或人が彼に向ひ、澤山な持株のうち、少々それを賣つて大いに儲けてはどうかと勧めたものである。すると彼はキツパリ色をなして斷つてしまつた。曰く、その言ひ草が面白いといふべしである。

「私が株を持つて居るのは、その事業に賛成したからであつて、金儲のために株を持つて居

るのではないのです。金、金なんて事業の粕ではないですか。その粕を大事さうに、しかも必要外に慾して一體何にするんです」

と云つた。如何にも彼の云ひ分としてふさはしい痛快な言葉であつた。快男兒大倉、彼こそ華族面を鼻にかけぬ、一生事業により國家に盡した風雲兒としてまだく生かして置きたい人物であつた。

エロテツク 王俊輔・伊藤

イトー・俊輔なんて云つたんでは、御存じの方が少いかも知れぬ。彼こそ後の公爵伊藤博文公なのだ。

伊藤博文、御維新當時の伊藤俊輔は、女をたらすことにかけては全く天稟の才能を有して、柳暗花明の巷に出没して、盛んに豪放な生活をやつたものである。

これを皮肉つてか、明治三十四年に正岡藝陽が「嗚呼賣淫國」と云ふ暴露ものを、「伊藤博文、梅の本梅香、市村家橋」の三人寫眞入りの口繪をデカデカとつけて出したものであつたが

これは忽ち當局の忌諱にふれることとなり、發禁を喰つてしまつた。

處で彼の一寸圖變つてる點は、公が所謂手をかけた女といふのは、大部分が古手の女性で新しいものは餘り喰ひ荒しては居ないことであらう。この點は共々豊太閤の秀吉君が、後家や出戻りさんを相手にしたとかといふことに能く似てゐるのである。

彼が終生を友とした梅子夫人だつて、もとはと云へば、下關の藝妓であつた。すみ子を離縁した後關係したのを、そのまま宿の妻とした譯であつたが、たとへ相手は藝妓でも、生涯の妻とするからには、正式の手續きを履んで置かねば可愛さうだと云ふので、三々九度の式には、高杉や、井上や、其他當時の親友を招いて立ち合はせたが、さて彼等がさうとは知らないで行つて見て花嫁と顔を會はせて驚いた。連中の誰もが知つてゐる藝妓であつたので、流石豪の者達も暫くアツケにとられた態であつた。

しかし、公がこれをと見込んだ程の女性であるから、身分卑しい泥水稼業の者でも、あれ程の道樂者である夫を持ち乍ら、微塵も嫉妬がましいことはなかつた。しかも立派に人妻としての勸めをつとめ上げ、後年公が不慮の災禍に遭ふてたほれる迄は、全く後顧のうれひなからしめざる如き、極めて安らかな生涯を送らしめたのは、公にしても偉かつたにちがひはないが彼

女の心底又偉とすべきものではなからうか。

華族會館故事來歴

明治二年、

話は七十年前に遡る。文明開化がスナイドル銃の筒先きから飛び出して藩籍奉還が行はれた。ここに公卿諸侯の稱を廢し、總てを華族と稱せしめられたことに初まる。

明治四年、

廢藩置縣實施後は華族は大多數はその居を東京に移した。

この時畏れ多くも「華族獎勵の詔」は降つた。これに感激奮起した華族は、智を開き才を研ぎ、以て聖旨に奉答せんため、ここに華族會館を建設することを申合せ、麴町區永田二丁目、舊二本松藩邸を借りうけて、華族集會所とした。

明治七年六月、

同族有志百五十名が會し、有栖川二品親王を館長に奉戴した。さらに太政大臣三條實美、左

大臣島津久光、右大臣岩倉具視等が指導となつて、華族の善導につとめ、華族勉學所を興し、續いて華族集會所を華族會館としたのであつた。かくて

明治九年一月五日、

華族會館の盛大な開館式が行なはれた。

「夫れ華族の務めたるや、皇室を輔翼し、人民を保安するに在り……」

「夫れ爵あり以て士民の上に位し、祿あり以て萬金の惠を辱ふるものは華族なり……」

と云ふやうな言葉が、この開館式の祝辭のうちに連發されたといふから、當時の華族は、かなり精神的覺醒と階級的團結心に燃えてゐたものらしい。かくするうち早くも

明治十七年七月七日、

は來た。赤煉瓦の洋館の窓からさしこむ陽光が、食卓のビイドロ・コップに跳ね返つて泰平の世を壽いでゐるこの日——都大路を馬蹄の響も輕やかに疾驅する黒塗りの二頭立の馬車、馬車の横つばらには大きな金箔定紋がギラ／＼輝いてゐた。

馬車の眞中にふんぞりかへつゐてるのは、金色眩ゆいばかりの大禮服のお殿様の姿である。これこそ、宮中の嚴そかな授爵式から退下して、華族會館の祝賀の夜會へ乗り込む、嬉しい華

族様の絢爛豪華な姿なのだ。

この日、華族令と、五爵制度が延告したのであつて、平民共の顔上高く鎮座した華族の總數は六百六家であつた。

彼等の得意然とした姿を、御維新の血生臭い風を腹一杯に吸ひこんだ平民達は、丁髷が消えた五分刈の頭を幾度も／＼なでながら、全く夢心地でボンヤリ眺めたものであつた。

この六百六家を解剖してみよう。

舊公卿華族は家系の統流により攝家を公とし、清華を侯とし、大臣家を伯とし、以て三家の支分せる家を子としたものである。

さらに御維新の際に後飾せしめられた。南都諸寺の僧徒並に由緒深い神官を男として授爵せられたもの百六十六家。武家華族は徳川、島津、毛利の三家を特に公とし、國守大名を侯とし、舊祿高十萬石以上を伯とし、十萬石以下を子とし、大藩つき家老の一萬石以上を男として授爵せられたもの二百八十四家、又舊家及び維新元勳功勞あつたものを新に華族に列せられ、授爵せられたもの百五十六家に及んだ。

これ等の六百六家の人々が華族會館のメンバーとして、宛も飛ぶ鳥も落す勢で、當時「四民

の上に立ち衆人の標的」となつたのであつた。

かくして豪華な華族の錦繪はくりひろげられ、明治廿三年七月、華族會館は、當時最も輪奐の美、壯麗を極めた麴町區内山下町一の一社交倶部として有名だつた鹿鳴館の拂下げをうけてやがてそこへ移つた。

煌々たるシャンデリアの光の流れる、この華族會館の大ホールで、維新の元勳夫妻など、顯官貴紳をはじめ、蜂腰の佳人、夜會服の貴公子が、ワルツのメロデーにつれて、夜もすがら踊り狂ふ姿は、美しくも又あくどいまでのアブノーマルな姿であつた。

こうして現在の華族會館が建設されるまで卅餘年、この鹿鳴館跡が華族會館となつてゐたものである。それは、日比谷公園の前、帝國ホテルの隣に、今は内國貯蓄銀行などと變つてしまつたがあの國寶の黒門が、豪華な昔を偲ぶ華族物語を秘めてゐるわけである。

館長も岩倉具視、伊達宗誠、鍋島直大、三條實美、淺野長勳、東久世通禧、蜂須賀茂韶を経て十六代様の徳川家達公が、明治卅年から昭和十年二月までの卅八年間も館長をつとめあげて次いで小島の公爵様である鷹司信輔氏が館長に就任したのである。

禮國法人の紀織である現在の華族會館は、鷹司館長の下に松平頼壽伯、仙石正敬子、保科正

昭子、織田信恒子、南岩倉具威男の五氏が、幹事となつて、書記、給仕、電氣係、交換手など五十餘名の大世帯を切りまはしてゐるのである。

五爵制度が誕生してから五十三星霜――

昭和十一年現在では華族の總數は九百五十五家にまで飛躍してゐる。

これらの中には、徳望、財力共に秀れた華族もあるけれども、數多い華族のうちには、赤化華族、桃色華族、インチキ華族、貧乏華族……などの代名詞で、平民共からですらすつかり嘲笑される華族もポカ／＼陽氣の加減でもなからうが頻發して來た。

時代意識の急變と同時に、華族社會の廓清の聲は、貴族院改革問題と相關聯して、いよ／＼世論のやかましいものがあるがのも誠に宜なるかなである。

百萬圓すつて怒鳴られた華族

先年十五銀行がいけなくなつたとき、その馬鹿騒ぎに叩かれた華族で、大頭株の中に、舊藝州廣島藩の淺野家がある。

主人の長勳公は、舊幕時代に大名生活をした者の中で、一番長生きしてゐるものの一人であらう。もう九十の坂を越せば、片足どころか兩足ともとづくに棺桶の中へ突込んだ年輩であり乍ら、元氣は反對に壯者を凌ぐの勢ひである。大隈さんの百二十五歳説は、こちらの云草だと云つたやうな顔をして頑張つてゐるのである。

それでゐて頭腦が綿密といふのか、細かい所へ氣がつくといふのか、舊臣名簿みたいな闇魔帳のやうなものを拵へてゐて、何の某の娘は當年何歳で、何の某の所へ嫁入つて、子供がもう幾たりあるかつてことまでや、其他舊臣の身分に關する一切のことを書きとめて居る。それほどだから、お正月などでも、舊臣のうち一人でも年賀に來ない者があると、老人すこぶる御機嫌がわるいといふもんである。

算盤高いことも亦有名で、淺野家へ何か纏まつた物を賣り込まうとする者は、一々老人に會つて、直接の取引なのであるが、どうも少しも高いなと思はれると、そんな算盤の持ち方は無いだらうなんかといつて、そつぽを向いてしまふさうである。

ところで此親にして此倅の長之氏はなんと不肖な子であつたものか、現在十五銀行の重役をして居ながら、八千なにがしの新株を背負ひこんでゐた。その上整理のためには、重役として

の私財三十萬圓も吐き出さねばならなかつた爲、新株の拂込みと合せて、約百萬圓に近い大損害を蒙つたから、老人怒るまいことか、六十何歳になつてゐる長之氏をとらまへて、この大馬鹿野郎と、いきなり怒鳴りつけたと云ふから達者なものである。

社會主義者の殿様と藝妓

舊久留米二十三萬石の有馬家、まづ財産は五百萬圓級動がぬところと云はれて居たが、頼寧伯になつてから、俄に貧窮組に成り下つてしまつた。そして一萬七千坪もある萩窪の屋敷も、家ぐるみ賣つてしまへと買手を探したりするやうになつた仕末、一體何がそれ程彼を變らせてしまつたか。

伯は農科大學の助教授をして居た程度に、世間の事はよく知つてゐる。だから、うつかり、山師連の口車に乗つて先祖傳來の財産に大穴をあけるやうな薄ノロではない。むしろ華族としては切れすぎる、賢明な部類に屬するが、その賢明さが又御當人をつまづかしためた障害物を作つた態である。

伯は華族社會の新人を以て自任してゐる。彼はトルストイの大的崇拜者で、傳統的な階級思想に左右せられることを、何よりも恐れてゐる。それで成すこととする事、殆んどがこの社會の尖端を切つてゆく。先づ、日比谷公園の「草むしり」の一件で同族をアツと云はせ、農村問題に關する研究では、實に眞新しい意見をのべる。次には水平運動の先驅者となつて、同愛會を起したが、この社會事業のためには忽ちのうちに十萬圓ばかり使つた。それから橋場へ建築した鐵筋コンクリートの勞働學校のことだが、彼はこれにも十三萬圓ばかり投げだした。これが但し、投げ出しきりではない。維持費として行きがかり上、年々五千圓は注ぎ込まねばならぬ立場に立つた。

何だかんだと、さう云ふことで高利貸から五十萬圓ばかり借り込んでしまつた。頭の固い舊藩の老人共が一齊にびつくりしてしまつて「お上は社會主義者で御座る」と顔をそむけ出したのも無理からぬ事情ではあつた。

先代の頼萬氏は所謂御大名めいた生活の一生を終つた。この頼萬が亡くなつて、今の頼寧伯が遺産相続をした時、稅務所では、有馬家の財産中、持つてゐる諸會社の株券だけで三百萬圓と評價した。しかしそれから三年たつて、いよゝゝ相続税を納めるころになると、株はどん

と下つて、中には全く紙屑同様のものもあり、相繼當時の十分の一位に下落してしまつた。株の配當は思ふやうに入つて來ないし、貸してある地所の地代は満足に拂つてくれないし、自分のやつてゐる社會事業では金を食ふ。高利貸からはジャン／＼責め立てられるといつたあんなばいで流石の新人伯も弱つた。

國危くして忠臣現はれるといふが、それはすでに昔のことで、今の世では駄目である。まして老人共からは一かどの社會主義者扱ひされてゐた伯のことである。それ見たことかと云つた調子で表面は兎も角、内心から同情して相談相手にならうと進んで出る者は中々現はれなかつた。

そこで仕方なく、本邸の地所千五百坪を、坪二百圓の相場で賣物に出したが、サツパリ買手はつかなかつた。それでは萩窪の一萬七千坪、あればどうだらうかと、これも賣物札を立てて見たが、やつぱり賣れなかつた。これには流石の頼寧伯もよほど困つたと見えて高利貸の金を借りて、社會事業を起したのが間違ひのものであつたと零したと云ふ。

それからこれはたしかに大正十三、四年の頃であつたらう、總選舉の時であつた。彼は舊藩から名乗りを揚げて、代議士の候補に立つたものである。ところが、此地方は政界の古武者野田大塊翁の永年の地盤であるから、勢ひ野田翁を向ふに廻して、戦はねばならない。しかも相

手が相手だから、彈丸も相當に要るものと最初から覺悟であつた。先づ二三萬は捨てねばいけぬ位とたかを括つてゐた。ところが案外、戦ひがすんでみるとかつきり五萬圓と云ふ運動費がなくなつてゐた。

理窟から云へば、何しろ御當人が華族社會の新人だし選舉區も舊藩であつて見れば、金は使はなくても、昔の縁故と言論で押して行けさうに思はれる。それに全權候補の上を行つて、運動費を六萬圓も費つたと云ふことは、少し合點のゆかないやうなことに思へるが、彼に云はせればこちらが金を持つてゐるから、取らずには置かないのださうで、それも選舉なんてことは、華族仲間である、形式一天張りのごたくした事よりも、本當の人間らしい交渉だから、六萬圓位の金を費つてもせい／＼したさうである。

ところでこの時の副産物で、博多水檢の舟子事件といふ一寸艶つばい話があつた。事件の内容は水檢の藝妓である舟子を二千圓で落籍し、毎月五十圓の手當をあてがつて、飼つてやるといふだけの事で、人間の頼寧としては、一寸した何でもない事だが、うるさいことには、以前の殿様の後取息子であり、又皇室の藩屏である華族であるが爲に、その亂れ飛んだデマも甚しかつたのであらう。

彼女舟子の身代金も金二萬圓だなどと大袈裟に喧傳され、四方八方から攻撃や非難の聲が擧つたので、折角纏つた話も、餘りの世間のやかましさに、參つてしまつて、舟子の方にはいくらかの涙金を呉れてやつて話は全然立消えとなつてしまつた。

華族の黨主が、選舉に出かけて行つて、戦ひ最中に、選舉區で藝妓を大金出して身受けするといふことは、成る程眞正面から考へると聊か穩かでないことかも知れない。

だからこそ一時は譯もないやかましい問題となつた譯であるが、何しろ本人はトルストイの崇拜者である。それに大多數は中學を中途退學位の素養しかない者によつて、構成されてゐる華族層に居て、固い殻を破つた生活に恐れを抱いてゐる彼としては、もつと人間味のある本當に愛し合つた相手が欲しかつたのであらう。そして偶然その相手として、藝妓舟子を見出したとすれば、あんなにまで、騒ぎたて、生木を裂かした彼の周圍の社會が、餘りに無慈悲、無理解であつたとも云へよう。兎も角、彼としては、社會事業に數十萬圓の金を費つて、高利貸に責められることよりも、これは一層淋しかつたことに違ひない……と同情する次第である。

子爵令嬢の結婚エピソード

子爵澁澤榮一は、財力の點でこそ第二流であつたが、その閱歴が普通の成上り者と違つてゐるのと、久しく財界巨頭の位置を占めて居た關係上、政府でも輕々しくは取扱はず、實業界で子の地位を利用して、これを表看板にしなければ、何をするにもどうも不便を感ずるといふ有様で、その隱然たる努力は、社會の各方面に迄及んで居た。

彼は努めて自家の閥閥も造つたが、一方又進んで他の閥閥を製造する媒介者ともなつたものである。神田鐮藏のために、山内家の息女を世話せんとして奔走した事などは、その特例であらう。

澁澤家の閥閥中、最も著聞せるものは男爵阪谷芳郎と、法學博士穗積陳重の二人であらう。阪谷男は岡山の鴻儒の倅である。彼は明治十七年帝大文科を首席で卒業し、大藏省の屬官となつた。

當時澁澤子は、經濟上の意見を徴するとの名目の下に、都築馨六、添田壽一、久米金彌、瀨

田健次郎、棚橋一郎、杉江輔人等の小壯學士を飛鳥山の別邸に招いて酒宴を開いた。阪谷男もその席に列した一人であつた。

やがて一同着席するのを待つて穗積博士の紹介あり、やがて用意の酒肴は運ばれたが、その時盛装した一美少女があつて、時々姿を現はしては客に茶をすゝめ、酒を酌ぐ風情の何とも云へぬ艶麗さに、一同は全く酔へるもの様に、期せずして視線をこの美少女に集中した。

その夜は世間の雑話に時を移し、よい程に宴を撤して解散となつたが、それから數日を経て、穗積博士は阪谷男の下宿を訪ね澁澤子爵の娘を妻に迎へんことを勧めた。しかし餘り突然の話で阪谷男も最初の程は、我が耳を疑つたが、能く聞けば、先日の酒宴に現はれた美少女が當の娘で、過日の會合は、名を經濟上の意見を徴することに藉り、實は愛娘の婿選びをする目的で開かれた宴會であることが判つた。

しかも多數才人の中から、阪谷男を選んで、白羽の矢が放たれたといふことであつたから、阪谷男たるもの、何うして是を斷ることが出來よう。男冥加にあまつた話であつて、彼は即座に承知した。

他の一同はこれを傳へ聞いて、さてはそんな魂膽であつたかと、今更の様に、阪谷男のため

に引立役になつた愚を後悔するやら、岡燒半分に欺かれたことを憤るやら、中でも都築男の如きは初めから澁澤子の娘に意があつて、陰に運動を試みつゝあつた折柄とて、その落膽失望は他所の見る目も氣の毒なばかりであつたといふことである。

阪谷男の風貌は、所謂若殿様然として、年と共にその美容は衰へず、あまり若々しく見えるところから、人物上の貫目に乏しいやうな観があるが、しかし何しろ、大學を出たまゝで、一度も洋行しない中に大臣になつたなどは、財豪の閥閥をバツクとする上に、人物そのものに、それだけの價値を備へてゐることを思はしめる。

彼は人に向つて舅父の名を口にする時は、必ず澁澤さんといつてさん附けにした。加藤伯がこれを忠告して、耳觸りだと云つてからは、さん附は止したが、こんどは先生の尊號を以て之に代へたなどは、よく云へば駙馬の禮を失はぬものと云つてよからう。

大隈夫妻を困らせた不義の戀

御維新當時は聞多といふ名で、しきりに活躍した井上馨侯は、次男であつたので、志路家の

養子となり、娘と夫婦になつて子供まで生んだが、文久二年英國へ密航したことから離縁となり、子供は志路へ置いたまゝ井上家へ復歸した。

其後明治政府の役人となり、築地に居を構へることになつたが、當時の青年官吏は、大隈邸を倶楽部のやうにして盛んに出入したものである。彼等の一氣當千の勢ひは當るべからざるものがあり、日夜議論を戦はせ、所謂築地の梁山伯時代を現出したものであるが、井上侯もやはりその仲間であつた。

と、その中、同僚の中井櫻洲が洋行することになつたので、彼は貫ひ立ての妻君武子のことか氣にかゝつて成らぬので出立に臨んで大隈夫婦に頼みこんで、呉々も後事を依頼して行つたが、いつの間にかこの中井の妻君と井上侯との間に戀が成立してしまつた。どうもこの道ばかりは誰もつい無軌道におちいりやすいものである。しかし中井櫻洲は名題の亂暴者で名があつたから、もしやこのことが本人に知れようものなら、何れたゞでは決して濟む筈はない。

後事を頼まれてゐた大隈夫妻もこれには全く困つてしまつた。これをどう處置してよいものか、並大抵の心配ではなかつた。が預つた責任上、何んとか處置をとらねばならなかつたのである。そこで大英斷をもつて中井の歸朝を待たず、媒酌役となつて、改めて武子と井上侯とを

結婚させてしまった。

随分これは思ひきつた亂暴なことをやつたものであるが、それでも中井は案外さつぱりして居て、歸朝して、それを聞いたが何一つ文句を云はず綺麗に武子との縁を切つたのは實にえらい男とも云へよう。

この武子が井上侯の終生の妻で、なか／＼のしつかり者であつたから、内田山の雷公とニツクネームのあつた程の氣むづかしゃの侯を能く援けて、家庭を圓滿におさめて行つたのである。

自分の妻を斬つた侯爵様

侯爵黒田清隆と云へば、長い間大臣をしたこともあり、北海道の開拓者として名を成した人であるが、もとは薩州の輕輩で、前名を了介と云つた。

その了介時代に徳川旗本の娘を妻に貰つたが、明治の十一年頃であつたかしら、或時一刀の下に斬り殺してしまつた。どういふ譯であつたのか、何れ秘密があつたのであらうが、表面は泥酔の上で斬つたことになつてゐる。しかし理由はともかく、どんな事情があつたか知らぬが

これなど亂暴を通り越して無茶と云ふものであらう。

その後深川の木場の富豪で、信濃傳の娘でお瀧といふ、すこぶるシヤンを後妻に迎へたが、主人の侯爵よりも三十あまりの年下で、親子ならば兎も角、夫婦といふには餘りにも不釣合であつた。それでも釣合はぬは不縁の基といふやうなことにも成らず、侯爵が死ぬまで仕へて居たが、主人が死んで間もなく情夫をこしらへ裁判沙汰にまでなつて黒田家を去り、一生その情夫と同棲してゐたといふ。

後家さんの入婿になつた公爵

木戸孝允公は、長藩の代表的人物で、政治的手腕に於ても、今にその比類なしとまで云はれた。この木戸公についても、多數の女性が彼の身邊をとりまいてゐるのである。話は古いが、中でも京都の藩邸を預つて居た文久時代には、祇園、島原、先斗町、三本木等と、苟も花柳の巷には、毎夜のやうに姿を現はして、盛んにあちこちを泳いだものである。

當時三本木に藝者をしてゐたのが、あの有名な幾松で、これは後に木戸夫人となり、めぐま

れた生涯を送つたが、こゝに一つ、取り残された逸話がある。

といふのは、但馬の出石に、公が一時身を隠してゐた當時、荒物屋の後家さんをひつかけて堂々入婿でおさまつてゐたといふのであるが、なか／＼相當のもんであらう。

野風呂で拜まれる殿様學者

舊熊本の藩主で、東洋研究の學者として、日本の學界よりは、むしろ國外の學者間に有名となつてゐる細川護立侯は、今でこそ小石川高田の本邸に納まつて、隠然書齋生活らしいが、あれで若い時代にはなか／＼どうして豪放なところを見せたものである。

貴族で司法停年法の特別委員長をやつてゐた時である。委員の松室致博士が、會議の席で侯を攻撃したとかで、答辯はそつちのけにして氣色をかへ、委員に於て委員長を不信任ならば、早速改選したが良しからうと云ひ放つて室外へ飛び出してしまつたやうなこともある。

これも若い時の話である。

舊領内の五箇莊地方へキャンプ旅行を試みた。この五箇莊といふのは肥後と日向の國境にあ

る一部落で、明治初年まで平家の落武者が隠れて居たと云はれてゐる。所謂人跡稀なる別天地なのである。

そこへ山を越え、谷を渡つてキャンプ旅行をやつたのだから、當時の侯としては、現今でいへば飛行機で極地の探險に出かける程の冒険にひとしかつたであらう。それでも幸ひ山犬などの餌食にもならず、途中無事で部落に入ることが出来た。

さあ村では、殿様のお成りぢやと云ふので、文字通り上を下への大騒ぎとなり、兎も角一門の宗家である一番立派な家へ侯の一行を案内した。そこで先づ何より、旅のお疲れを勞らはねばならぬといふので、風呂へ入れることになつたが、この地の習慣として、この村には、どこの家にも内風呂の設けはなく庭の一隅に野風呂が造つてある。で仕方がないから其處へ案内した。

ところが折あしく雨が降り出したので、傘をさし乍らその野風呂へ入つて居ると、村中の老若男女が、ジャン／＼侯の周圍を取り圍み、雨にぬれながら土下坐して、うや／＼しく見物してゐるといふわけで、さすが豪放な侯も、これには顔負けしたといふ。

侯はスポーツが好き、登山がすき、又書物は一層愛好する。

先年外國へ廻つた時、パリーの古本屋を漁つて、東洋に關する書物ばかり、三十萬圓も買ひこんで歸つて來た。その一部分を好學家の爲めに熊本に於て、一週間ばかり公開したことがある。邸内には又、美術室を特別に設けて世界の學界を騒がす程な名品ばかりを集めてゐるが、兎に角彼は、性格が淡泊で、宣傳をやらないため、餘り世に知られてゐないのである。

百萬石華族の豪華版

同じ大々名華族で、門閥とか資産とかの關係でなしに、部内の秀才として將來に多くの期待をかけられてゐる者は、海軍では島津忠重公、陸軍では前田利爲侯である。

前田侯はいふまでもなく、舊加州百萬石の大々名華族、軍人らしいガツチリとした體格の持主である。酒はいくら飲んでもびくともしない。彼が歩兵第二聯隊長時代には、愛馬に跨り、朝霧をついて鐵蹄憂々と聯隊へ詰めたものであつた。

先年駐外部官を勤めたことがある。

彼は夫人同伴で三年間の外國生活中に、俸給の外に、三十五萬圓ばかり澁谷の本邸から取り

寄せて使つたといふ。それでも侯は兵隊さんだけに、これで質素だと云ふんだから、若し贅澤にやつたらどれ程費ふのか一寸貧乏人には話が大き過ぎて見當がつかない。

前田侯はごく内輪に見積つても一億圓は下るまいといふ財産家である。澁谷の新邸には百五十萬圓の工費がかゝつたことも、本館の三階建のみで六百七十一坪あることも、又女中共にまで床の間のついた部屋を一つづつ與へて居ることも、外國貴賓の接待所まで設けてあることも何もかもさして問題とするに足らぬであらう。

敷地は半分だけ開放した。それでも後まだ二萬坪残つてゐることになる。そして本邸だけで一年の經常費が八十萬圓から百萬圓はかゝる。それもその筈で、事務員だけでも六十何人といふ多人數を抱へこんで居る。この外に東大久保には教養塾といふのがあつて、長男の利健君を中心に舊藩の秀才學生を十數名養つてゐたが、こゝでも萬事が大がゝりで電話だけでも八本もひいたりしたものである。

この利健君の生母といふのは、大正十二年の春巴里のホテルで客死した様子夫人である。夫人は天性の佳人で、容貌も思想も立居振舞も、その他萬事が大々名の奥方らしく出來てゐた。特に夫人のお化粧法は有名なもので、白粉といふものは殆んど用ひなかつた。いろ／＼のク

リームを研究して使用し、その上夜と晝、朝と夕方、晴天の日と雨天の日など、その折々に適應したパウダーを使った。だから夜見ても晝見ても、夫人の顔は少しも變らず、いつも生々としてゐたさうである。今の菊子夫人は、若い時は多感な人であつたが、もう三十を過ぎた年輩で、侯爵との間には二人の子供が出来てゐる。

曾つて酒井家から輿入する時の支度は、世間を驚かした程大がゝりなものであつた。松坂屋へ注文した物だけでも簞笥八棹と長持九荷にぎつしりと詰つて居たさうである。

金の延棒にアクビさせてる華族

舊薩州藩公爵島津の財産は、動産不動産合せて八千萬圓はあらうと云はれてゐる。邸は芝にあるが、表門から玄關までの距離が約四丁もある。だから表門は芝の白金猿町にあつて、本館の位置は大崎町となつてゐる。

この外に別荘が十五箇所、使用人二百餘名どんなにきりつめたつて、一年の経費が七十萬圓もかゝるさうだが、例の十五銀行の騒ぎの際は、三百万圓近い大穴を明けたし、その上川崎造

船所への投資百萬圓を要したにはいかな大島津も骨身にこたへた。

それで本邸の大部分を開放して金に代へ、銀行や何やかあの形をつけると共に、財政の大整理を断行した結果、一年の経費二三十萬といふことになつた。

この時整理の任に當つたのは、舊藩士の樺山愛輔伯であつたが、すつかり整理案を立て、忠重公に見せると、どうぞ宜しくと云つたきりで、目をハンカチで掩ふた。後でわかつたことであるが、永い間養つて來た家職の人達を、整理の犠牲として俄に失業させることが悲しくて熱い涙がとめどもなく流れたのださうである。

當時、そんな思ひをしなくても、島津には黄金の延棒がアクビをしてゐるぢやないかと云つた者があつた。なる程、島津家には金の延棒があつたにはあつた。舊領内の百姓共が掘り出して、それを銘々に吹いて、或程度の金塊とし、いくらかの報酬を貰つて、城内に納めたのがこの延棒である。

ところが科學の進んだ現代に於て、そんな原始的な採掘法ではいかぬといふことになつて、島津家からは三百万圓もの資本を投じ、株式組織にして鑽石を買入れ、文化的の装置で吹き分けをやつて見たところ、何うした譯か金糞ばかり多くて、どうもうまくはゆかなかつた。反對

にその爲に延棒を大方食つてしまつたと云ふことである。

小鳥で儲けてゐる公爵

堂上華族と一口に云つても、皆が皆まで、山師連の食ひものにされてゐる譯でもない。中には玄人はだしの商賣氣があつて、たんまり儲けてゐると云ふ華族様もあるから面白いと思ふ。現在華族會館の館主をしてゐる、鷹司信輔公爵邸へゆくと、玄關に小さい紙の衝立が立つてゐる。よく見ると、その表面には、巖谷一六居士の筆で、慶至福迎の四字が書きつけてある。それだけではまだ充分五攝家の一である鷹司公に商賣氣のあることを説明するには足らぬかも知れぬが、試みに一度目黒の禽舎を訪ねて見るがよい。

こゝには十幾棟といふモダンな小鳥小舎がづらりと並んでゐる。公が大枚四萬圓を投じて拵へたものだが、十姉妹やセキセイインコの全盛時代には、外國からいろ／＼な種鳥を取りよせて、變り種をしこたま製造し、それを次から次へと手際よく捌いて、十四萬圓は儲けた……と華族仲間でも専らの評判であつた。

尤も公爵御自身はむきになつて此の噂を打消して居たし、禽舎に働いて居る者が、一度に三千位の取引のあつたことをうっかり口外したとかで、こつびどく叱られたとか、そんなゴシツプが亂れ飛んだものである。

しかし、インコだけでも變り種、七十種三百羽を賣つたのは間違ひのない事實だとのことである。

もと／＼公爵は理科大学出の本物の動物學者であるから、小鳥を種に金儲けをするに何の不思議はなく、何れその中には白い鳥でも飼ひ初めて、又儲けるだらうと、口のよくないうるさ雀は噂してゐることである。

娘を賣物にする貧乏華族

公卿華族といふと、すぐ貧乏華族を思ひ出す。垂衣のかはりに蚊帳を着て内職をしてゐたもの、お姫様と呼ぶ大切な娘を、將軍の側妾に出して無上の光榮と心得たもの、金錢次第でどうにでも動いたもの等々、すべて幕末時代の彼等の悲惨な状態であつた。

事實はそれほどでもないのに多少大袈裟に宣傳された點もあらうが、徳川氏の政策が極端に京都に壓迫を加へた結果として、彼等が想像以上に困窮してゐたことは事實であつた。

この困窮は、勢ひ維新後にまで持ち越され、明治十七年七月、それ／＼爵位を賜つた頃にはその日の生活にさへ差支へて居る者が少くはなかつた。それに就いてこういふ話がある。

當時宮中で何かの御宴があり、それに彼等が招かれると、宴席に出された器具を失敬して歸り、それを自分の家の臺所用に充てるやうな極貧のものがあつた。しかもこれを常習的にやられるので、しまひには宮内省でも閉口してしまひ、後には、公卿華族と他の高官連を區別し、たとへば一人前十圓の御食事を賜ける場合でも公卿華族のだけは、無くなる器具代を見積り、

五六圓程度の物ですませて、その損害を少くするやうにしたといふ。

明治天皇は誰からともなく、その事を聞き召されて、彼等の貧窮振りをあはれませられ、公卿華族救護の思召で、お手許金百萬圓を賜つたことがある。

當時の堂上華族は三百あまりだから、これを頭割りにすれば、一人あて三千圓位の御恵みに浴することが出来る譯だが、中には慾の皮のつっぱつた者もあつて、公侯伯子の等級に應じて分配すべきものであるなど、きかないことを云つたものもある騒ぎだつた。

一方ではまた、全身これ慾の塊であるところの高利貸どもが、今までは鼻もひつかけなかつた公華族の裏長屋を訪ね御下賜金を掻き上げやうとの魂膽から、猫のやうな態度でどうか私共の金を御使ひ下さいとわんさ／＼と機嫌取りに押しよせるといふあさましい光景が展開されたものである。

これを見てとつたのが宮内大臣土方久元伯で、この調子では、彼等に纏つた金を持たせても到底身につくまいとの考へから、いろいろ評議の上、御下賜金は一先づ宮内省に保管し、年々その利息のみを分配して、永久に上の御恩恵に浴せしめることに決定した。

それを聞いて彼等は、折角の御下賜金を、宮内省が横取りするとは以ての外だと、大騒ぎに

なり、中には血相を變へて宮内省へとなりこんだものさへあつたが、てんで相手にはされなかつたことは勿論である。

お蔭で今日では、公爵は四百圓、侯爵は三百五十圓といふ風に毎年利息の分配を受けてゐるのである。

貧乏だからと云ふ譯のみではなからうが、一體に華族は金の話にはひつかゝりやすい。衣食に困らぬだけの財産はあるが、それは多くは固定して居て、思ふやうには使へない。躰は樂に贅澤はしたい。せめて自由に使へる金があれば思ひ残すことはないが、その金がない。何とかして遊んで金の儲かる話はないかと考へる。

その心理をつかんで巧みに取り入り、あべこべに彼等を喰物にするのが大小さま／＼山の師連で、この連中に噛みつかれたら最後、多くは泣くにも泣けぬ悲境のどん底へ突き落されるのである。

某公卿華族などもこの例であらう。

人物とてもさほど卑しいものではなく、食ふに困らぬだけの財産もあつたが、例の儲けたさ一杯からまんまと狼連に噛みつかれ、日歩一圓二三十錢といふ突拍子もない高利で融通して、

あれやこれやと馴れぬ事業に手を出した結果は型通りに家も邸も全部無くしてしまひ、最後には牛込の某高利貸が差押へをやつたが、その時には夫人の帯止と一本の簪の外に何一つ押へるものとはなかつた。

かういふあんばいだから、其日から食ふに困つた。山の手の長屋へ引越して如何にして生活すべきかの實際問題に直面し、命がけて奔走しはじめた。

しかし、さて華族といふ手合は、同族に對する情誼が不思議な程冷たい。相當財産のあつた以前ならば兎も角、本邸も差押へられて長屋へ引込んだやうな者は誰一人見向きもしない。

そこでとう／＼娘を賣物に出した。

尤も賣物と云つても流石は侯爵を賜はる程の家柄である。まさか、藝娼妓や、カフェーの女給には出せない。そこで十萬圓の持參金さへある男ならば、身分の如何に拘らず、いつでも娘の婚に迎へて、侯爵家を相続させるといふのであつた。

今頃の世智辛い世の中に、どこの物好きが十萬圓も出して、貧乏華族の婿になるものがあるかと思はれたが、世の中はとかく不思議なもので、關西方面から忽ち二人の候補者が現はれてその一人を選ぶやうな話になつて、この噂はそのまゝ消えてしまつた。さて其後どうなつたこ

とか。

こうした様に今では令嬢の賣物はそこらに掻き集める位多く轉がつてゐるとの話である。

金持華族の超弩級

華族の中には金持が相當ある。舊大名華族中から試みに三百萬圓以上と稱されてゐる者を列挙すれば次のやうである。

- 五千萬圓 侯爵前田利爲、侯爵鍋島直映
- 四千萬圓 侯爵細川護立、公爵毛利元昭
- 三千五百萬圓 侯爵徳川義親、伯爵松平頼壽
- 二千萬圓 侯爵山内豊景、公爵島津忠重
- 一千五百萬圓 侯爵徳川家達、公爵徳川圀順
- 一千萬圓 公爵島津忠承、侯爵伊達宗彰、侯爵黒田長成、伯爵阿部正直、侯爵淺野長勳、伯爵酒井忠克

八百萬圓 公爵徳川慶光、伯爵立花鑑徳

七百萬圓 侯爵蜂須賀正氏、伯爵松平直亮

六百萬圓 侯爵池田宣政、伯爵久松定謨

五百萬圓 侯爵徳川頼貞、伯爵龜井茲常、伯爵伊達興宗

四百萬圓 伯爵井伊直忠、侯爵池田仲博、子爵太田資業、子爵相馬孟胤

三百五十萬圓 子爵本多忠昭、子爵鍋島直庸、子爵阿平正一

三百萬圓 子爵西尾忠方、男爵徳川義恕、伯爵徳川達孝、侯爵松平康昌、侯爵佐竹義春、伯

爵酒井忠正、公爵三條公輝、伯爵南部利英、伯爵上杉憲章、子爵毛利元雄、伯爵有馬頼寧

この様な彼等の資産たるや、その殆んどが自己の勤勞によるものではなくして、父祖傳來の財寶や不動産によるものである。

殊に我國の文化の發達による土地の値上りにより、或ひは又彼等が單に投資者として懐手をして、遊んでゐる中に、その事業經營者そのものゝ手腕宜しきを得た結果、資産を蓄積したものである。

即ち彼等の富の大部分は封建時代からの父祖傳來の財産が、我が社會經濟の發展によつて増

加せしめられたものであつて、彼等自身の功でもなければ、彼等の勞働への正當なる報酬として出來上つたものでもない。云ひ換ふれば、全國民が明治維新以來苦心慘憺して築き上げて來た社會經濟的成果を、彼等は懷手をしながら漏れ手に粟の如くためこんできたものであると斷ずる向もあるやうだ。

債鬼の爲坊主になつた子爵

A藩四萬石の藩主であるB家は明治維新史に黄金文字を畫いた勤王の名門である。貴族院議員であつた先代が晩年の事業に失敗して淋しく逝つた後、若いB君がその子爵家を相續したのであつた。

僅か五六千圓の借財であつたが、それを背負はされたB君こそ迷惑な話であつた。全く親から貰つた財産と云ふのが借財といふ重い負擔であつて見れば全く味氣ない次第であつた。彼は學校も中途退學を餘儀なくされ、年中監視の眼おさ／＼怠らない債鬼の追及にタジ／＼となつて、いやつく／＼嫌氣がさして、舊臣知、人の家を轉々として逃げ廻る放浪の生活を續けてゐた。

しかしこうして逃げまはるB君のアチトは實に巧みにどうして嗅ぎ出してくるのか、いつもすぐに債鬼に發見されてしまふのであつた。「金をかへせ／＼」の聲に震へ上つてゐるB君に同情した或友人が、場末のアパートに彼をかくまつた。退窟なB君は晝間はこつそり華族會館に現はれて、パチ／＼碁を打つては憂鬱な心をまぎらはしてゐた。

流石の債鬼群も今度こそはB君の隠れ家を發見することも出來ず、かくて無風帶の數ヶ月は續いた。

久しぶりに飲んだビールのうまかつた味が舌の上をすべつてゐる上機嫌で、初夏のすが／＼しい或夕べ、華族會館からB君が出て行つた。いつも右に折れる道をその日は、左に曲つて虎の門の方から出ようと十數歩歩いて行つた時のことである。突然、

『子爵様!』『殿様』と云ふ聲に、何げなく横をむくと、サア大變だ。そこには例の債鬼群の顔が三つ、何時の間にか現はれてゐるのである。こいつあしまつたとB君、心臓も爆發せんばかりに驚いては見たがどうにもならない。もみ手をしながらチリ／＼つめよつてくる三つの顔が、

『殿様一寸お車に——』

と、そのまゝB子爵は自動車に身柄を檢束されて某所に連れこまれてしまった。
 生殺與奪の權を握つた城主の令孫としては餘りにも氣の弱かつたB君は、それからまもなくのことだつた。美しいオールバックの頭を丸坊主に剃つてしまつて、「借金取りに申譯なし——」とかで、たう／＼眞物の僧侶になつてしまつた。そして舊領地の某名刹の寺院の奥深く懺悔の生活に入つて居るといふ數奇な運命哀話がある。
 華族會館の門前を左に曲つたばかりに墨染の法衣をまとひ、債鬼の爲に念佛を唱へるに至つたとは、ア—ラ恐ろしの世の中かなである。

華族會館の草花まで泣く話

又、貧乏華族數のお話で恐れ入るが今一つ。
 何しろそのお殿様、根が世間知らずのお公卿だけに、萬事にうといといふ譯だつた。華族會館の應接室にノホホンと座つてゐるこのお公卿を取り圍む山師連から、例によつて、「殿様々々」とおだてあげられ、山カン會社のマネキン重役に祭り上げられてしまつた。で、結局は型

通り、筋は運ばれて、彼氏は、一萬圓餘の借金を背負はされてしまつたのである。

それだけでは勿論おさまらなかつた。

お氣の毒にも詐欺罪の汚名すら、きせられやうとしたのであるが、禮遇不享の處分が目前に迫つて來たのに驚いた殿様、この非常時打開の爲に、可愛い、自分の娘を、精神病院へ五六年も、留學してゐたといふキ印太鼓判つきの或金持の坊ちやんのところへお輿入れさせて、その借金の整理をしやうと、丸で悲壯みたいな決心をしたのである。

そして暫く過ぎた或日のことである。

この結婚の見合ひといふよりも、商賣の手打ちが華族會館で行はれた。見合ひと云つたところでニタ／＼笑ひ乍ら花婿殿が現はれたわけではない。

奉書に包んだ結納金の金一封と、花婿殿の寫眞を捧げた黒紋付姿の家令が現はれて、殿様がニコ／＼顔でこれを受取つて、それでこの嚴な見合ひの儀式はアツサリ終つたといふのだから、われ／＼平民共にとつては、あまりアツケラカンとしてゐておよそ想像も及ばぬ場面ものである。こうして知らぬ間に、お家のために人身御供となつた可憐なこの令嬢のために華族會館の窓邊に咲く草花でまが、悲しみと同情の爲に泣いてゐたと云ふ一聯の悲話である。

いさ下

全書店で販賣して居るす
切實のれは直接本房へ御註文

早おく求め

黒田正隆著	奈緒順著	箱館小史著	陸軍中將 堀内文次郎閣下述	東亞書房 編輯部編	中村武郎著	秋月正雄著	牧山九著	山門王吉著	東亞書房 編輯部編	東亞書房 編輯部編	山門王吉著	小牧琢磨著	高倉晃著	吉岡義一著
世界の景氣は何時爆發するか	政界財界膝栗毛	百年後の人種戦争	大西郷を語る	皇國軍人に懃ふ	東西偉人逸話集	要領百パーセント戦法	女スバイの暗躍	明朗爆笑大會	常識讀本・人生百課事典	見よ！此躍進日本の姿	怪奇犯罪實話集	財界巨星出世譚	逆巻く太平洋	非常時日本の外交陣
定價十錢 (送料二錢)	定價十錢 (送料二錢)	定價十錢 (送料二錢)	定價十錢 (送料二錢)	定價十錢 (送料二錢)	定價十錢 (送料二錢)	定價十錢 (送料二錢)	定價十錢 (送料二錢)	定價十錢 (送料二錢)	定價十錢 (送料二錢)	定價十錢 (送料二錢)	定價十錢 (送料二錢)	定價十錢 (送料二錢)	定價十錢 (送料二錢)	定價十錢 (送料二錢)

發行所 東京芝區三田四町二番 東亞書房

願ひます

代金引替は御容を
切手代は二割増に

御注文は

須山滿洲男著	奈緒順著	加藤弘一著	山門王吉著	斯波雪夫著	片山哲平著	山門王吉著	秋本孝雄著	山門王吉著	滿蒙事報社編	五島富士夫著	村田和雄著	頭山滿翁述	齋藤一郎著	秋月正雄著	海南隱士著	五島富士夫著
風雲を孕む外蒙古	世間の裏をのぞく	軍事小説 爆彈・護れ祖國日本	戰術奥の奥・外交は是て行け	映畫スタア千夜一夜	國際情緒・ハルビン物語	實話讀物・職業麗人純情集	若返り法とホルモンの話	謎の秘境・蒙古の全貌	歐洲の風雲・世界大戰は起るか	ニユー・ス世界各國珍聞奇聞集	謎の秘境・蒙古の全貌	重大國事の秘密を語る	遭難した内大臣 齋藤實とはどんな人か	千波萬瀾の生涯・人間高橋是清	組閣難の真相 廣田内閣はどうなる	二・二六事件の記録
定價十錢 (送料二錢)	定價十錢 (送料二錢)	定價十錢 (送料二錢)	定價十錢 (送料二錢)	定價十錢 (送料二錢)	定價十錢 (送料二錢)	定價十錢 (送料二錢)	定價十錢 (送料二錢)	定價十錢 (送料二錢)	定價十錢 (送料二錢)	定價十錢 (送料二錢)	定價十錢 (送料二錢)	定價十錢 (送料二錢)	定價十錢 (送料二錢)	定價十錢 (送料二錢)	定價十錢 (送料二錢)	定價十錢 (送料二錢)

發行所 東京芝區三田四町二番 東亞書房

今評判の東亞書房の十錢文庫

海南隱士著	覺悟せよ！次の大戦争	定價十錢	(送料二錢)
藤原達策著	支那は動く	定價十錢	(送料二錢)
國際研究會著	日本の財政・何年戦争に堪えられるか	定價十錢	(送料二錢)
沼上良太郎著	必ずあたる新商賣往來	定價十錢	(送料二錢)
山門王吉著	一讀鬼氣！妖奇怪談集	定價十錢	(送料二錢)
白木屋專務 山田忍三述	立身出世虎の巻	定價十錢	(送料二錢)
太田義孝著	財閥功罪史	定價十錢	(送料二錢)
奈緒順著	世界珍奇怪奇見世物	定價十錢	(送料二錢)
和田信義著	暗黒街往來	定價十錢	(送料二錢)
海南隱士著	明日の世界	定價十錢	(送料二錢)
岡山啓之助著	戦線に躍る日英米の勝敗	定價十錢	(送料二錢)
城南山人著	東日と讀賣の暗闘	定價十錢	(送料二錢)
東亞書房編	二・二六事件真相の真相	定價十錢	(送料二錢)
川上康吉著	誰にも出来る貯金法五十種	定價十錢	(送料二錢)
内藤伸二著	財づる物語り	定價十錢	(送料二錢)

發行所 東京市芝區三區四町二番六 東亞書房
振替東京八三三八番 電話三田三九八九番

滿蒙事報社編 定價五十錢 (送料五錢)

滿洲 官費 學校案内
給費

滿蒙事報社編 定價二十錢 (送料三錢)

小資本で 滿洲の職業 百五十
出來る 種調べ

滿蒙事報社編 定價二十錢 (送料二錢)

人を求むる新大陸は招く

滿洲の就職手引き

横から見た華族生活

〔定價 十錢〕

昭和十一年七月十四日印
昭和十一年七月十七日發行

著者 野村 繁

東京市芝區三區四町二六

發行者 角田 恒

東京市牛込區山吹町二ノ五八

印刷所 東亞書房印刷部

東京市芝區三田四國町二六

發行所 東亞書房

振替東京八三三八番
電話三田三九八九番

鐵道各驛ホームスタンド一手販賣

鐵道保養會

Printed in Japan

東京 東亞書房

